



東京女子医科大学学術リポジトリ
<https://twinkle.repo.nii.ac.jp>

(シンポジウム)アピアランスケアを多職種チームで届ける取り組み

著者名	山崎 多賀子
雑誌名	東京女子医科大学看護学会誌
巻	16
号	1
ページ	56-56
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.20780/00032786

アピアランスケアを多職種チームで届ける取り組み

山崎 多賀子
(美容ジャーナリスト)

このたびは、コロナ禍の大変な時期に、オンラインという初の形式で学会を開催されましたこと、心から感謝申し上げます。私自身、大変多くの学びがありました。

演者の私は 2005 年に乳がんを罹患したことから、現在のアピアランスケアの一部分に通ずる、がん患者の美容支援活動が続けてきました。今回は患者視点と病院内で看護師を中心に多職種が連携した美容支援とその効果検証のための研究について、以下のお話をさせていただきました。

ある日突然がんと宣告された人の絶望感、焦燥感を味わい、時間ともに現実を受け入れ治療に入りますが、そこで待ち受けているのが、治療による副作用です。特に脱毛を伴う化学療法の副作用による、頭髪や眉、まつ毛の脱毛、くすみやシミ、発疹など、外見の大きな変化は、治療や社会復帰へ向かう心をなえさせてしまうことがあります。

治療を続けながら、仕事や社会生活を送る人が増えているからこそ外見の変化は心の負担になります。とくに、外見とのアイデンティティが密接な女性にこの感情は強いといわれています。

実際に、国立がん研究センターの調査によると、化学療法の副作用による苦痛度ランキングでは、女性の場合 10 年以上前から一位が頭髪の脱毛。20 位中 6 割が外見によるものでした。同センターに 2013 年にアピアランス支援センター（野澤桂子センター長）が設立後は、「アピアランス（外見）ケア」の重要性は医療現場に広がっています。

化学療法による脱毛を経験した演者は、同じ悩みを持つ方のために 2008 年よりがん患者さん対象の美容セミナーを開始。2012 年より外部看護師の呼びかけにより、聖路加国際病院にて化学療法を受ける女性がん患者さんのための、ヘア、ネイル、メイクの支援を行うビューティサポートプログラムを院内開催。

2013 年より、同病院にて「外見の変化に対するケア」の化学的効果を分析するため、今回の学会長である池田真理先生（当時、東京大学大学院医科系研究科）をリーダーに、医師、看護師、美容の専門家である私たちと共同で「Beauty Ring」プログラムを開発。患者とその家族に QOL を図る研究をし、参加してくださった患者やそのご家族への影響について、研究デザインと、がん患者特有の QOL 評価尺度 FACT-G で実施した実証結果をご報告させていただきました。（★がん患者さん、ご家族ともに、治療が進むにつれ下がりがちな QOL が上昇または維持をしていたという結果が得られました）。

そのほか、具体的なメイクリカバリー法のポイント、さらには患者として、ピアサポーターとして、経験の視点から看護師さんに期待することをお話させていただきました。
